

還曆の目標

藤井 千明

宣教師を通してキリスト教に触れる

私は、一九五九年十一月十七日、福島県双葉郡双葉町の兼業農家に生を受けました。以前から生まれすぐに亡くなった兄がいると聞いていたので、母が、役所の書類が必要だといって取り寄せた戸籍謄本を興味本位で手に取り、母の越し方を想像できたのは中学生の頃でした。

私の出生は、兄の死産にも似た悲しみを払拭することになったようで、祖父母、まだ同居していた叔父叔母が、オムツかえやミルクやりを代わるがる手をかけて面倒をみていたとよく聞かされました。

しかし、すぐに年子で弟が産まれ、家族の関心は田舎特有の関心事である跡継ぎへと移りました。私はいっこうに笑わない赤ん坊だったこともあり、みんなで愛想良く反応する弟をあやしては大騒ぎ、気がつくとほうっておかれた私が大泣きして慌てたこともあったそうです。

思春期を迎えた頃にはすでに、なんて女は損なんだ、なんで男に生まれなかったかと思ふ気持ちもあり、無愛想な面持ちは変わることはありませんでしたが、ソフトボールや剣道の部活に浸っているぶんには何も問題はありませんでした。

一方でキリスト教に触れる機会が与えられたのもこの頃で、子どもたちが道を反れないようにと思う母は、私を宣教師の良い感化を受けるようにと、中高生会に参加できるようにお願いをしました。その第一回目がクリスマス会でした。私ともう一人を除いて、ほんどが男子学生でした。

集会は宣教師が全て英語で話し賛美集も英語でした。なにを言っているかは全く見当もつかず、ただ見慣れない食べにくいお菓子をほおばりましたが、それは手作りの爆弾ボールで、美味しいとは思えずただ甘いというだけでした。

二年位通ったと思いますが、その宣教師は二人の子どもの教育のために母国に帰るというので、お別れが近づいてきたことを知りました。もともと私の田舎は、長男を除いて郷里を離れるのが定番で、別れが特別なイベントであるという意識はありませんでした。でも、ナオミという女の子と私は急に親しさが湧いてきて離れがたくなり、おいてかれ症候群を味わいながらとぼとぼと家路に着きました。

彼女はもつと深刻で、家を飛び出し浜辺をさま迷って私を探したと噂話が届いた時には、私の脳裏に彼女の泣きじやくる顔が容易に想像できました。養子なのに堂々と自分の感情を素直に表せるその家族は、初めて接する外国人ファミリーであり、クリスチャンホームでした。

救いの経験

宣教師ご一家が帰国されたあと、今度は隣町にある救世軍浪江小隊に連れていかれました。母はすでに、二件隣りに住むご夫妻に誘われて一足先に集会に出席していました。

初めて会館に足を踏み入れた時、救世軍独特の制服姿の女性二人がおられました。違和感はありませんでした。

それよりもその顔の輝きにとっても驚きました。当時の小隊は、倉庫を手入れた古びた建物で、会館の真ん中には柱があり、床は土間であったように思います。集会が始まる前に部屋を暖めようと石炭ストーブに火をつけたところ、思うように火がまわらず、黒い石炭と新聞の位置を何度もずらして手間取り、二人で四苦八苦しているところでした。

その輝きと不器用さのギャップが、鮮烈な記憶として今でも思い出されます。

その輝きの底にあるものが、主イエス・キリストを救い主として信じる信仰なのだと思ふ。恵みの座で回心の祈りをするのに時間はかかりませんでした。

救世軍浪江小隊でのあゆみ

それから約一年後に新しい会館が建った後には、不思議なことに、我が家でも家庭集会

が開かれるようになり、誘えば父や弟も小隊の集会に出るようになりました。また、私は進められて、青年三人で小隊候補生という学びを始めました。父は救世軍の事がなかなか理解できなかったのか、将来救世軍の士官になるのかと何度となく聞いてくるので、これは小隊で聖書の事を勉強する教材なのだとは何度か説明したので覚えていきます。今思えば、父は私の行く末をなんとなく予想していたのかもしれませんが。

高校を卒業する頃、父は再びお酒を飲みはじめ、経済的にも精神的にも不安定な日々が続きました。父を避けて母と私たち兄弟は叔母の家に身を寄せたり、弟は友達の家を隠れるように渡り歩いたり、家族はバラバラになってしまいました。それだけではなく、近所の人も、父や母の職場の人も、親戚も、誰もかれもが呆れてしまい、父の面倒を見て回復の手助けをしようとするとする人はもういませんでした。

この時に私は、「人間に頼るのをやめよ、鼻で息をしているだけの者に。どこに彼の値打ちがあるのか」(イザヤ書二章二二節)と聖書にあるように、人に左右されず神にのみ頼る信仰に気づかされたのです。この頃は、跡継ぎの弟も複雑な思いにかられ家に寄りつこうとはしなかったのです。私は十年後には実家に戻って家を守ろうと思いました。

母の勧めもあり、手に職をつけるため看護婦を目指しましたが、実家の世話にはなりたくないと思ひ、住み込みで働くことのできる救世軍清瀬病院に就職し、推薦してもらった

准看護学校に合格して通わせていただきました。

社会人としての信仰生活

上京してからは、家族の悩みからは解放され、充実した日々を送ることが出来ました。仕事や学校の学びも充実し、また同年代の信仰者との交わり、集会に出席する楽しみも増え、恵まれた時を過ごしました。

しかし、数カ月が経ち、自分が本当に将来看護婦として働くことが神様の御旨なのかと、問う祈りをするようにと導かれました。エバンゼリンホール（当時の救世軍本営）で行われたある集会に出席したとき、将来を神様の御用をするために召されていないかとアピールがなされました。

召命をうけていると感じる人は、講壇に上がってきて献身を表してくださいとのことでした。私は、仕事を通して多くの人を助ける働きをすることはできても、直接神様のことを伝える事は出来ないと思っていた頃でしたので、恵みの座でお祈りして神様の声を聴こうと思いい前に進み出ました。

跪いて祈ろうと前に進み出たのですが、後ろから背中を押すような力を感じ、そのまま

講壇に上がってしまいました。ちようどその時には、士官としてではなくとも、将来を神様に献げて歩みたいと思う人も上がってくださいと、招きのアピールの幅が広がり、内心ホツとしたのを覚えています。

献身を考える

この後から献身する事を真剣にお祈りしようと示されましたが、何か特別な啓示が与えられてからでいいだろう思いましたし、まだまだ神学的にも経済的にも献身できる環境は整っていませんでした。

当時は病院から看護学校の費用を出してもらいながら働き、卒業した後はその年数のお礼奉公という勤務をしなければなりませんでした。

当然私も、お世話になっていたりという人情的な部分を無視することは考えの中にはありませんでした。事務長、総婦長、チャプレンを兼任する小隊長にも話す機会が与えられましたが、一様に声を揃えてまず学校を卒業してからという返事で、そのように事に落ち着くはずでした。

召命を受ける

しかし、聖書を読んでいて、あるところに目が留まり驚きました。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、『ヘロデのところへ帰るなど』夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行つた」(マタイによる福音書二章十一〜十二節)。

占星術の学者たちは、ヘロデ王に、「見つかったら知らせてくれ」、と言われたのにもかかわらず、身の危険を感じてまでも、神様の声を優先して聴き従つたのです。神様の御声に従う時というのは、状況が整つた時ではない、また私が従いたい時ではなく、神様が進む道を告げられる時が献身の時なのだと思われました。結果的に、私は病院も准看護学校も辞めて、士官学校に入校したいと申し出ました。

予想通りの反対がありとても悲しい思いをしましたが、最終的に病院長の言葉が私の心を軽くしました。

「看護婦になる人はこれからでも見つけられるけれども、救世軍士官に献身する人を見つけないから」と、私の献身を受け止めてくださったのです。ここで得た収入

を、清瀬小隊会館建築のために献金して、持ち物も後輩に譲り、ほとんど手に持たないで入校したいと思いました。それは、本当に神様が私を導いてくださるなら、全てのものは必要に応じて満たされるのだという事を、この目で見て感じながら歩んで行きたいと思う気持ちからでした。

他にも、いくつかのきっかけとなる出来事がありました。最終的には、『あなたがたがわたしを選んだのではないわたくしがあなたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたを任命したのである』(ヨハネによる福音書十五章十六、十七節)との御言葉に確信を得て決心しました。

しかしまだ、十九歳の未成年でしたから、周りの方々が心配してくださるのは当然のことでした。士官志願者部長の坂本明子先生も、わざわざ実家の福島まで足を運んで、両親の承諾を得るために挨拶にきてくださいました。

先に電話で伝えた時に、母は私の想像を超えて大反対しましたが、意外とすんなり承知した父の様子を見て腹も治まり、和やかな対面となりました。話を終えた後には、田んぼのせりや、畦の蓬を摘んで、春の味覚を楽しみ、田舎料理に会話が弾みました。

その緑豊かな里山が、三十数年後の東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故に

より、帰宅困難地域になってしまふとは想像だにしませんでしたが、やはり私の帰る所ではなかったのだと、不思議な摂理の御手を思わされます。

救世軍士官学校入校

一九七九年三月末、私は、「神の兵士」の学年に受け入れられました。同期生は、立石達成、貴美子御夫妻と、川口綾子さんの合計四名でした。立石夫妻は、五人のお子さんを連れての献身で何かと苦勞の多い訓練だったと思いますが、周りの私たちにとって、子どもたちの存在はとて暖かい雰囲気呈し、二年間の何かと緊張感のある場面を柔らかにしてくれました。また、私は信仰生活においても経験が浅く、一番若いという事もあり、同期生に見習いながらしがりについていきました。

二年間の学びの中で教えられたことは、やはり人間は人間、神様の働きの側につく者も罪ある人間なのだということでした。この罪人の救いのためにキリストは十字架で死なれたということ、そして復活の力で私たちを恵みの中に招き入れてくださったということでした。この憐みに満ちた恩寵を一人でも多くの人に語りたいという熱い気持ちに満たされ、士官学校を卒業することができました。

献身 独身時代

士官として任命を受けた初陣の地は名古屋でした。東海道連隊本部付き及び浄心小隊の小隊長でした。そこは前任者の女性が途中で辞められたうえ、女性の信徒のグループも離れてしまっていました。しかし真実な数人の信徒の集いと、変わらずに出席してくる子どもたちと楽しく過ごすことができました。

一年後には新たな任命を受けて移動となり、札幌小隊長として転任しました。連隊と小隊と保育園の複合した建物で、毎朝かわい子どもの声を聞くこともできました。初夏からは目に優しい緑豊かな北海道でしたが、冬は極寒に加え雪深く、毎朝子ども登園前に、連隊長と雪かきをするのが日課でした。この二年間は経験豊かな二つの保育園長がおられ、また年に二、三回は、連隊内の同労者や青年、信徒が集う連合の集まりがあり、色々と励まされ支えられて奉仕をすることができましたが、突然の弟の交通事故や父の癌の手術や葬儀など、身内のことにも時間とお金を費やす年でした。

三番目の任地は、福島県会津若松市の若松小隊長として、独身最後の三年間を過ごしました。初めて一人で過ごす任地でとても開放的な気分ですタートしました。一人暮らしを心配する人がいましたが、福島県人に囲まれている安心感と、近所の子どもたちが日曜学

校に導かれたりで寂しさを感じたことはありませんでした。

しかし健康上の理由で、一人で献身の生涯を過ごすのは困難だと感じました。もともと起立性調節失調症の体質で子どものころから立っているのが苦手でした。日曜日は朝九時の日曜学校から聖別会（大人の礼拝）までずっと立ち通し、冬の社会鍋は街頭に立ち続けますが、他の奉仕者が到着する前に体調を崩して中止して帰るということもありました。

私は独身で献身生活を送ると決めていたので、迷惑をかけるようならやめようかと真剣に考えました。しかし、神様が私に命を与えてくださったご計画の中に女性としての祝福をお考えなら、結婚という選択肢も視野に入れて祈ろうと思いました。幸せな家庭生活を味わった記憶がない私にとっては、人生計画を神様に委ねるといふ賭けのようなものです。

結婚と親の気持ち

ある日、一通の手紙が届きました。それは、引退された祈り深い夫人士官からのものでした。救世軍では言わずと知れた祈りの人で、この方に祈っていただければ安心ということと、受験の朝には祈ってもらおう学生もいました。手紙は、いつも祈っていますよということと、あなたは結婚というものをどう考えていますか？という質問でした。私は正直に

自分の現状と、結婚について祈り始めたことを報告しました。不思議なことは、相手がだれかということは後から聞かされましたが、この方が祈ってくださいった方なら大丈夫だと思いました。

自分の父や叔父たちのお酒にまつわる苦い思い出が多々あったので、お酒タバコ無しなら多少の性格の違いはあっても、献身という共通の志があればやっていけると思いました。御心ではないと感じたら何時でも正直に話すということを経験して交際を始めました。二人で祈って迷いがなければ前に進みたいと思えました。そのあと、何も妨げるものはなく、神様が良いと言われていると自然に受け入れることができ、結婚に導かれました。私たちは、結婚式を挙げてすぐ任地の岡山小隊に赴任しましたが、夏の休養にはちゃんと新婚旅行をしておこうと思えました。それは当事者の新婚夫婦が旅行に行かないのに、両親たちが旅行に出かけたと身内で話題にされていたからです。あとで分かったのですがその旅行は、息子が結婚してしまって跡継ぎの見込みが全くなかったと嘆いての東北地方傷心旅行でした。

そういえば主人の関係者で式に出席したのは両親のみでした。主人は長男の末っ子で建具屋の跡継ぎでしたが、小学生の時に救世軍笠岡小隊のボーイスカウトに導かれ高校生まで地元で過ごした後、キリスト教の背景のある静岡のお茶屋さんに就職し実家を出ました。

この就職も、一度家を出てしまつたら後を継がなくなると、親同士でだいぶ揉めたそうですが、世間で苦勞すればいつかは戻ってくるかもしれないと期待は続いていました。

そのような親の期待に対する穴埋めや恩返しとなるとは思いませんが、父の仕事仲間や親せきにも話せるように、キリスト教といえども恥ずかしくない親孝行をしようと思ひ、どんなに忙しくても、どんなにお金がなくても、毎年帰郷すると決めました。

結婚して五年目に授かつた娘を連れて帰るようになると、成長を見る楽しみが増しわだかまりも解けて、互いの再会を待ち遠しく思うようになっていました。

転任と子どもの成長

娘は、一九九一年十一月三日に、北海道の遠軽で生まれました。私たちは、子どもの成長をこの北海道で伸び伸びと、緑豊かな大地の自然や雪の中で、たくさん生き物に触れることのできる情操教育をと高望みをしていました。

しかし、翌年十月二日着任の新しい任命を受けて東京に引っ越ししなければなりませんでした。一歳の誕生日という大きな喜びをイメージしていましたが、着任後まだ一か月の慣れない場所で静かに祝いました。思い返せば、第一とする士官の献身の生涯を、第二の

ものに摩り替えるかもしれない危険から、神様は早い段階で私の目を開かれたのかもしれない。ません。

半年後にまた新たな転任があり、これを加えて都内で七回、引越しました。不思議なことにこの間、娘は一度も転校はありませんでしたが、いずれの学校でも諸問題が起こり、その都度初めての経験、慣れない対応に迫られて苦労しました。特にいじめや不登校の時期には、いわゆるモンスターペアレンツとならなければ娘が理解されないというジレンマを味わいました。

また、娘は成長期と重なり私と同じ体質を受け継いだことがわかり病院通いに奔走しました。昔は、周りの人からは理解されずになまけ病とか気持ちいが弛んでいると言われてきました。精密検査をしてもどこも悪くないのに不調を訴えます。夕方になると頭痛がとれ胃腸の働きも良くなり、活動の範囲も広がり食欲もわきます。治る病気というより、自分の体質を理解して状況を耐え抜く方法を身に着けることでした。

医師からは、シヨック症状を引き起こすほどの低血圧でふだんの生活をしていることに驚かれ、晴れて診断名もくたびりました。治療のための投薬を親子一緒に始めましたが、近年の治療が進んでいることにたいへん驚きました。

その後、「赤い羽根募金」の奉仕を二時間した後、娘は驚きの叫びをあげました。

「みんなこの程度で疲れたって言うていたんだね！」「こんなに楽なんだね！」と。もともと薬嫌いな娘は勝手に投薬を止め、通院もやめて自然に任せるようになりました。

そのうちまた私たちに新たな移動先が決まりましたが、娘にとつてそこは辛い時期を過ごしたかつての場所でした。これを機に親と別れて暮らすことを決心し、自立したいというので、チャンスを見逃さず後押しをしました。

社会人になつてからは無理がたたり救急車で運ばれたこともありませんでしたが、それほど無理のできる精神力が備わっていたことに驚かされました。人の目からはマイナスと思われることで気後れすることがありますが、神様はほんとうにすばらしい方で、何を以て成長の糧や機会とされるのか、私たちの想像を遥かに超えています。

東日本大震災に纏わること

時系列で言えば話が前後しますが、二〇一一年三月に起こった東日本大震災は、語らずにはおられないほどの出来事でした。

私の属する救世軍はもちろんのこと、他教会と協力体制をとるなど、広範囲に、そして多様な必要に答えていく前代未聞の支援活動となりました。海外からの応援も数か国に及

びその連絡や資金の扱いなど、事務的な労力も想像を絶する時間と人材が必要となりました。それらのことがかなり大きな余震の続く中で継続して行われましたが、奉仕を望む人々の精神もすばらしく、実際に現場に行くことのできない方々も、社会鍋募金でのアピールや、支援物品整理など、エピソードを書くには枚挙にいとまがありません。

私の実家や兄弟、親戚、友人にとっては、悲しくそして意に反する道のりを歩むこととなりました。津波の被害や建物倒壊の危険に晒されることに加え、福島第一原子力発電の爆発事故による放射能汚染の危険から、全町民が強制的に非難させられることになったのです。世界的なニュースとなり、いまだに対応の遅れや責任の問題が取り正されています。

原発反対の署名運動も盛んに出回りましたが、そのような町であるからこそ、原発関係の仕事に従事していた身内が生活を営むこともできませんでした。

あれから七年、私の生まれ故郷はいまだに許可がないと立ち入ることができず、野生動物の思うままに荒らされ廃屋と化しています。それでも、一緒に住むようになった母のために、年に一度は一時帰宅の許可をとり里帰りを続けています。

汚染された山や川、思い出の学校や商店街を目に焼き付け、お墓参りをして帰ります。そしてその行き帰りには、ちりじりばらばらになってしまった母の兄弟や親戚に会って、お土産を交換したり懐かしい話に花を咲かせています。

還暦を迎えること

私は還暦に向かって一つの目標を立てています。それは、四八歳の誕生会のお祝いの席で示されたことでした。次の自分の干支を迎える時には、靈的にも精神的にもほんとうの大人になろうと思いました。それは、若い年齢で献身と奉仕に全霊を傾けて前進してきた自分自身の内面を、手綱を緩めて少し手入れしておきたいと思ったからです。私の生い立ちから自分自身を分析すると、アルコール依存症の父の影響によって性格形成されている部分が、大きく物事の考え方や行動に影響しています。

人の気持ちに寄り添うという面では、相手の気持ちを満足させることに過敏になりすぎないようにすること、また、他人から受けてしまう不愉快なものに対しては、心の反応を正直に受け止めて自分自身をケアするテクニクを身に着けること、そしてポジティブに表現しながら人と関わっていく楽しさを味わえるほどに大人になりたいということです。

その還暦の時が、もうすぐそこまで来てしまいました。縁遠かった同級生から突然連絡が無い込み連絡を取りたいというので、昨年三月、神田神保町の救世軍本営に行われた3・11記念集会に出席してもらいながら再会しました。

被災地や支援の映像を見ながら互いに涙ぐみ、気恥ずかしい思いもどこへとやら消えて

沈んだ気持ちにならざるを得ませんでした。

今は、それぞれが震災も還暦も乗り越えてちりぢりに過ごしている同級生がこのお祝いを企画するために、すでに会合を重ねているということです。

私は、献身イコール家も故郷も振り返らないと思っていました。震災の影響を受けて絆の深まりをもった友たちが、時間を見つけてこのための作業をしていると知り、また、ちよūdō毎年一時帰宅をしている時期で、開催場所もいわき市の温泉なので母をつれて行ってみよūdōと思っています。

まだまだ、私の人生は続くのではないかと思っていますが、先ことは神様のみ知るところです。人生の節目に自分史を書くという機会が与えられたことを感謝しています。

何より、母と終活の話をしていた時に、ペンクラブの皆様のクリスマス会に同席させていただいたことは幸いです。母は、簡単なものでいいから俳句集を自分の葬儀の参列者にお配りしたいという願いがありました。

この「百花繚乱」の企画がペンクラブの方々の新しい目標と知った時、すぐに母を仲間に入れてほしいと思いました。会の皆様のアドバイスをいただきながら、母子ともども完成の日を心待ちにしております。

愛唱聖句

* 申命記五章十節

わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える

* 詩編一一五編一節

わたしたちではなく、主よ わたしたちではなく あなたの御名こそ、
栄え輝きますように あなたの慈しみとまことによって

* コリントの信徒への手紙第一 十四章二〇節

兄弟たち、物の判断については子供となつてはいけません。

悪事については幼子となり、物の判断については大人になつてください。

愛唱賛美歌

* 救世軍歌集二四番

東からも西からも

* 子どもリビングプレイズ プレイズワールド二一

試練はつらいけれど